



かつての名画「旅情」そのままのベニスの風景



大運河とサンタマリア・デル・サルネテ教会

つと昔にテレビで観た映画「旅情」。ベニス舞台にキャサリン・ヘップバーンの恋を描いた名作だ。まだ子どもだった私は中年女性が旅にロマンスを求めるというストーリーに興味がなく、ひたすらベニスの美しい町並みに目を奪われた。運河が張り巡らされた石造りの町並み、小さな太鼓橋、サン・マルコ広場のカフェ。世界にはこんな不思議で美しい町があるのかと胸がときめいた。だから、20代の初めにベニスを訪れたときには驚いた。まるで変わったときではない！私の目にはあの映画そのままの町に映ったのだ。ゴンドラの舵を取るお兄さんも映画と同じ人かと思ってしまうほどだった。映画の制作が1955年から30年も経っているのに・・・。

”まちはステージ” 風土と歴史そして人を映し出す鏡



星野 知子

ほしの ともこ

新潟県長岡市出身。女優・司会・キャスト、NHK連続テレビ小説「なっちゃんの写真館」でデビュー。ドキュメンタリー番組で世界40カ国以上歴訪。映画「失楽園」で、日本アカデミー賞助演女優賞優秀賞受賞。著書「食べるが勝ち！」「パリと七つの美術館」等、日経新聞にコラム「あすへの話題」(木曜掲載)を連載中。

そのころの私は、町というのは年々近代化されていくものと思こんでいた。日本は経済成長のまったただ。東京も、私が生まれ育った新潟も古い家はどんどん建て直されてビルが増えていた。ベニスだけ時が止まっていたのだろうか。憧れの町を散策しながら疑問に思ったもの設しながら、古い町並みは尊重され保存されていないことに気がついた。の江戸時代!)の建物に普通に暮らしていたりだが、それだけではなく、やはり日本は急速に町全体として美しくない。その上、地方の町や

だ。しかし、パリもロンドンも新しいビルを建てる。30年やそこらで町はそう変わるものではヨーロッパの人は今も17、18世紀(日本する。石の文化と木の文化の違いと言えそう変わりすぎた。統一性のないビルや家が並んで

駅はどこも似かよって地域性が薄れてしまった。

そんな日本の町並みを残念に思っていたが、意外にも外国の人が日本を訪れると、住んでみたい、とてもエキサイティングだと誉めたりする。新幹線でびゅんびゅん走ると、どこまでもいろいろな形の家が続くのがすごい、あきないよ、と言う。確かにヨーロッパの旅では、町を出たとたん延々と田園風景が続き眠くなってくる。日本は景色も目まぐるしく変化するし、統一性のない町や家がかえって楽しいらしい。とらえどころのない町づくりも魅力的だという。ビルが林立する大都会の中に、小さな路地や抜け道がある。角を曲がると何があるのだろうかとかウキウキするのだそう。大きなビルの陰に地上げに負けなかった傾いた家ががんばっているし、古さと新しさがめっちゃめちゃに混じっていて面白いという。なるほど、きっちりと整理された町に暮らしている人たちは、そう思うのかもしれない。実は、私はパリに一週間も滞在すると、美しい町がとても冷たく圧



昔ながらの長屋の向こうに超高層マンション(東京・月島界隈)

迫感があるように感じてくる。

私もヨーロッパの人たちと同じ気持ちになったことがある。東京の佃のあたり、見上げるとウォーターフロントの高層ビルが聳えているのに、昔の木の家が雑多に建ち並ぶ一角がある。人がすれ違うのがやつの小道に、どの家の前にも植木鉢が置いてある。「いつの間にか増えちゃって困っている鉢だけど、どれも愛着があるからねえ」というふうに入れられている。不揃いの鉢が適度ないい加減さで置いてあるところに風情があるのだ。これが同じ鉢が整然と並んでいたら息苦しい。

日本人はもともとこういう感覚で町づくりしてきたのかもしれない。行き当たりばったりだけど、何となく日本人の曖昧さに通じていて居心地がいいところもある。統一性のある町づくりがもう無理とするならば、雑然とした



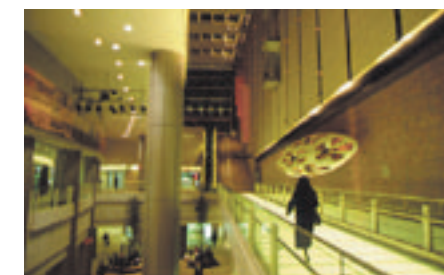
アーベインピオ こどもたちが遊び回る屋上広場



アーベインピオ 水辺のあるピオトープ 屋上緑化大賞受賞



ミューザ川崎 エントランスの彫刻



ミューザ川崎 シンフォニーホールの光のアプローチ



生活密着型の親しみやすい店舗が並ぶ



昔ながらの横町の雰囲気 40番地

川崎の“イメージアップ”に向けたまちづくり

現在の都市機構がまだ「住宅・都市整備公団」であった平成元年、はじめて40番地(ミューザ川崎があるところは昔、こう呼ばれていました。)の方々にお会いしたことが思い出されます。

当時40番地では「川崎駅西口駅前共同ビル建設準備組合」が組織され、共同ビルの建設が検討されていました。一方、川崎市では大宮町地区全体約8haにおいて都市基盤整備、都心機能整備、良質な住宅供給、住環境の整備改善等を行うことを基本方針とし、まちづくりの事業実現のため都市機構の登場を期待していた頃でした。何度かの打ち合わせの後、準備組合の総会で「大規模、複雑な再開発事業の施行者となることを都市機構にお願いする。」ことが議決されました。

都市機構の現地事務所が開業され、再開発計画を固める段階で、都市機構の所長さん以下職員が一体となって様々な関係者との協議を重ねました。都市計画道路の位置の確定、土地の交換から、市街地再開発事業、公団川崎大宮団地の建替事業、民間の住宅建設事業の支援といった様々な事業手法の組み合わせを検証しながら再開発のマスタープランが固まっていたのでした。

そうこうするうちにバブル経済の崩壊にあい、事業の見通しが立たない中、業務床の売却、情報・文化・交流拠点にふさわしい「ホール」の誘致のために関係者は随分ご苦労されました。そのかいあって、マスタープランに描いた再開発がここに実現し、川崎駅西口のイメージアップに大いに貢献したと思います。

当初、大宮町地区の再開発にとっても影響の大きい東芝堀川町工場跡地の土地利用転換の方向が明示されず、気をもんだりもしましたが、大宮町地区の再開発が実現されるのを待っていたかのように、商業機能を充実させた跡地の開発事業が着工されました。これらの事業と相まって、川崎駅西口は更に魅力あるまちに生まれ変わり、かつて言われていた、公害、ギャンブル、風俗の街といった川崎のイメージを払拭してくれるものと信じています。

私もコンサルタントとして機構の再開発事業のお手伝いをさせていただきましたが、このような素晴らしいまちづくりに参加できたことを誇りに感じています。



(株)澤田計画事務所取締役 澤田 秀一

川崎駅西口らしい“生活密着型の街”へ

川崎駅西口地区は様変わり発展を見せた東口に比べ、広大な空地(工場跡等)、住宅、小型店舗だけの、いわば古い姿をそのまま残した街でした。再開発事業はどうしても必要と考え、一地主権者として当社は、まちづくり計画理念の支持という基本的な立場を貫きました。事業主体の都市公団さん(現都市機構)は誠実に困難な課題に向かい合い、最善の計画を推進されたと思います。ただ残念なことは、周辺に未だ利活用が図られていない土地が残って街の一体化が不十分なことです。しかし現実には誇りになる高いレベルの街になりました。

権利変換にあたっては、この地は当社ルーツの一つであり、個人的にも「わが街」であって、新しい川崎の表玄関づくりに役立ちたいという想いがあり、いち早く決断をしました。

生活密着型という店舗構成コンセプトにも共鳴しました。この地区も東口と西口があってはじめて街としてバランスするわけですから、西口の個性と特徴を打ち出さなくてはなりません。背後の住宅地や高層集合住宅で暮らす居住者、オフィスに勤務される方と来訪者、そしてコンサートホールや音楽工房への来場者、いわば川崎の中心部にあってしかも地域に密着するという需要への的確な対応が課題でしたが、結果的にいい答えができました。オープン以来の経過も順調です。しかし街には変化が必要です。これからはベストに向けて変化することで常に新鮮な魅力を持ち続けていこう。

再開発事業の完成には時間がかかりましたが、それが幸いして、経済優先、利便至上という20世紀型の街ではなく、少子高齢というこれからの社会に適合した21世紀型の街へと、絶妙なタイミングで一歩踏み出せたのではないのでしょうか。落ち着いた雰囲気のある大人の街、心が安らぐ文化の街、そしてバリアのない街になれば、東口とともに、隣接する東京や横浜とも十分共存していける、川崎らしい個性のある街へ育っていくのではと期待しています。



(株)ドラッグストアオオモリ代表取締役 高橋 一男